
伎楽面制作プロジェクト

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクト目的

日本の伝統芸能の起源である伎楽とその面に触れ、時代背景や当時の作者の思いを感じながら、自分達の若い感性で生き生きした表現を加えたオリジナリティのある面を制作する。学生同士で共に制作を進めていく中で、互いの制作活動にも生きる表現力や視野の広さを身につけられるよう切磋琢磨し合う。

一度衰退した文化の復興に携わることで、今後の芸術、文化の在り方や自分自身のかかわり方を考える。

2. プロジェクト概要

昨年度、非常勤講師の建田先生の下に伎楽面の制作の依頼があり、美術領域専攻の学生で有志を募って、数年かけて十数体の面を制作することになった。昨年は参加者が3名と少なかったが、今年度構成員は7名に増えた。今年度のプロジェクトでは制作も進めながら、研究を重点的に行う。

昨年の研究では伎楽の伝来、衰退と、現在の復元にいたるまでの経緯に関して、そして芸態に関して調べた。今年度はさらに詳しく、伎楽の歴史や現在に至る経緯、今後の伎楽の在り方などを研究する。また、昔の文化を復興する、未来に残していくという視点から、過去の作品の保存・修復というアプローチも見つめなおす。

3. 代表者および構成員

・代表者

奥 美香 美術領域専攻 2回生

・構成員

卯柳 梨沙 美術領域専攻 3回生
中澤 春香 美術領域専攻 3回生
上路 市剛 美術領域専攻 2回生
稲村 優 美術領域専攻 2回生
土屋早李奈 美術領域専攻 1回生
ホジ クリステナ 紀子 美術領域専攻 1回生

・協力者

建田 良策先生 (非常勤講師)

4. 助言教員

谷口 淳一先生 (美術科)

第2章 内容や実施経過など

1. 伎楽に関する研究

(1) 文献による研究

伎楽に関する文献を読み込み、伎楽の歴史や形態などについての知識を深める。(通年)

(2) 天理大学への取材

我々に制作を依頼してくださった天理大学雅楽部の定期公演を鑑賞しに行き、実際の伎楽とはどのようなものなのか、自分たちが制作した伎楽面がどのように使用されるのかを知る。顧問の先生に取材を行い、伎楽についての理解を深める。(10月)

(3) 保存修復課の見学

伎楽面の研究を進めていく中で、破損の激しいものが多いことや過去に何度も修復されている形跡があることを知り、修復という分野に興味を持ったことから、東京国立博物館に保存修復課に依頼し、見学を行う。(11月)

2. 伎楽面制作

昨年度に引き続き、木彫によって伎楽面の制作を行う。

詳しい制作過程は第3章にて、太孤父という面を例に挙げて説明する。

第3章 制作過程

1. エスキース制作

どのような作品に仕上げるか、はじめに構想を練りながら粘土でエスキース（模型）を制作し、本制作のガイドラインにする。



2. 石膏取り

粘土原型の型を取り石膏に置き換える。(長期の制作に対し粘土のままでは保存が難しいため。)



↑石膏により粘土から取られた型



↑石膏に置き換えられたエスキース

3. 面取り

エスキースをもとに、のこぎりで木材の余分な個所を、おおまかに面取りする。



4. 荒彫り

おおよその輪がつかめたら、全体を荒彫りしていく。(↓荒彫り開始時の様子)



5. 面の内側のくり抜き

お面をかぶれるようにするため、内側のくり抜きを行う。



6. 仕上げ

細部の彫刻と目、口のくり抜きを行う。耳、後頭部、髪等の突起物もはりあわせる。細部の修正にはおが屑と木工用ボンドを混ぜたパテを使用する。

7. 完成

細部の修正を終了し、修正した箇所やのみ跡など表面を整える。必要に応じて紙やすり等を用いる。完成作品は最後の頁に掲載する。

第4章 研究結果

1. 文献から読み解く伎楽の歴史

(1) 起源

伎楽の淵源は遠い中央アジア、チベットやインド地方に発している。

その面に胡人型（アリア人型）の特徴が顕著に見られたことや、登場人物の役名にインド的な名称のあることなどから中央アジアの亀慈楽などが混和して成立した説もあり、アジア西域の文化に色濃く影響を受け発展を続けたと考えられている。その後主として大寺院の保護の元に伝承されたが今日には伝わらず、仮面、装束、楽譜、楽器が現存するのみである。

(2) 面について

伎楽面は中国や朝鮮には現存しておらず、日本の東大寺や法隆寺など限られた寺院においてしか実物を見ることが難しい。現在では正倉院に164面、東大寺に33面がおさめられている。

伎楽面は能面や舞楽面と違い、大型で後頭部を覆うような造りになっているのが特徴である。日本人や中国人の顔とはかけ離れた、鼻の高く耳の大きい面が多い。力士、治道、金剛など表現様式は1000種に及ぶ。彫刻に用いられる材木は楠、檜、桐が主であり、丹、朱、緑青を塗り髪や髭を植毛したものもある。酒に酔い口笛を吹いている様子など人間味をおびた面も多々見受けられる。

(3) 伎楽と現在

私たちが見受ける仮面は伎楽からの名残であるものが多々ある。日本各地に分布する獅子舞も伎楽の獅子がその源流とされる。伎楽の行道の露払いをしたとされる治道は今日祭礼行列の先頭に立つ猿田彦である。他にも天狗、治道の変容である王の鼻がある。これら二体は悪魔払いの意味を持ち、全国に分布し多くの庶民に親しまれた。伎楽の公演自体は衰微していったものの、このように現在でも様々な場所において、私たちはその姿を眺めることができる。

2. 天理大学雅楽部への取材から見る現在の伎楽と未来の伎楽

(1) 天理大学雅楽部 公演見学

伎楽において面はどのような役割を担っているのか、伎楽はどのように演じられるのかを実際に見て知った上で伎楽面の制作に臨むことを目的とし、天理大学雅楽部の第44回天理公演の見学に行った。

実際に伎楽の公演を見ると、役者の立っている舞台と観客のいる場所との距離が想像していたよりも遠いように感じた。これは私達が伎楽の公演の様子を近くで撮られた写真でしか知らなかったためであるからだろう。遠い位置から見る伎楽の黙劇（パントマイム）において、役者の身振り手振り、面の表情や顔つき、管楽器打楽器（雅楽器）による演奏の調子のみで、観客はストーリーや、登場人物の心情等も読み取らなくてはならない。そのため、面は演劇において非常に大きな役割を果たしており、伎楽面の持つデフォルメされた表情や面の大きさには必然性があるということを確認することができた。

今回の公演の曲目は伎楽、管弦、謡物、舞楽の4つに大きく区切られており、伎楽のみならず他の伝統芸能についても触れることができた。数多くの曲目の中で私たちは天理大学雅楽部の作った、雅楽（雅楽器による演奏

及び舞楽)と伎楽を組み合わせるといった新たな形態を持つ「伎雅楽」というものに関心を持った。

(2) 天理大学教授・雅楽部顧問、佐藤浩二先生への取材

「伎雅楽」は何か、どのような思いで作られたのかということを知るために伎楽面の依頼元でもある天理大学教授・雅楽部顧問の佐藤浩二先生に取材を行った。

現代に見ることのできる伎楽は『教訓抄』という書物の記載を元に復元試作されたものであるが、『教訓抄』は伎楽のみならず幅広い伝統芸能について述べており、伎楽と雅楽との関わりについても取り上げていた。舞楽とは雅楽器の演奏に合わせて踊るというもので、雅楽の曲目の一つとされているが、その起源は伎楽での舞の部分が取り上げられて雅楽と交わってできたものとされている。双方が深く関わっていたことや関わり方が面白かったことから、伎楽と雅楽を融合させてみようということで「伎雅楽」は作られた。作るにあたっては、伎楽や雅楽のどの曲目、ストーリーを取り上げ、どのように組み合わせ、そして新たな曲目を作るかということが考えられた。このようにしてできた「伎雅楽」は伝統芸能に対して保守的な考えを持っている人からすれば、好まれないものであるかもしれないが、これまでの研究でもわかるように、伝統芸能は時代の中で様々な変化を遂げ現在に伝わっているものである。「伎雅楽」は天理大雅楽部の伝統芸能に対する新たな挑戦として公演されている。

(3) 伎楽、伝統芸能の未来

飛鳥時代から上演されていた伎楽は平安時代を経て、鎌倉時代には次第に上演されなくなり衰退した。しかし昭和 55 年 (1980) に東大寺大仏殿昭和大修理落慶法要を飾る一大プロジェクトとして伎楽の一部が復元され、復興を遂げた。今日、伎楽は復元されただけでなく「伎雅楽」という新たな形態をも持つ

までに至っている。伎楽に限らず、こうした伝統芸能の新しい在り方を模索することは伝統芸能の存続、発展、進化において大変意義のあることなのではないかと考える。今回行った天理大学雅楽部への公演見学や取材は、伎楽に対して面の制作という形で携わっている私たちに、研究や制作の中で、伝統芸能の存続や発展、進化に対してどのようなことができ得るのかということを考えるためのきっかけになった。

3. 東京国立博物館保存修復課の見学

伎楽面の研究を進めていく中で、破損の激しいものが多いことや、過去に何度も修復されている形跡があることを知り、修復という分野に興味を持った。昨年度研究を進めていく際に東京国立博物館の方と知り合うことができたので、その方を經由して保存修復課の方に見学を依頼し、谷口先生に引率してもらい学生 3 名で見学に伺った。

“修復”というと壊れた部分を直すというイメージが強かったのだが、直す、手を加えるということはその作品に介入し性質を変化させてしまうリスクを孕んでいる。また、何度も修復を重ねることによって作品が劣化してしまうこともあるという。かつては元の作品をおさなりに扱った修復が行われていた時代もあったが、現在は修復の世界では、できるだけ作品を傷めないよう保存・管理することに重きが置かれるようになっていることを知った。

美術、芸術というものに関わりながらも、制作という観点ばかりにとらわれてしまいがちだったが、修復や保存の現場を見学し話を聞かせてもらうことで、作品を未来に残す、美術作品というものに関わる際の新たなアプローチを視野に入れることができるようになった。

第5章 まとめや反省、今後の展望など

1. まとめや反省

(1) まとめ

今年度研究に力を入れたことにより、伎楽の歴史や今後について詳しく知ることができ、それを制作にも役立てることができた。

ひとつの文化が栄え、廃れていった歴史、そしてそれが何百年ものときを経て復興され新たな形を生み出している現在、それに間近で関わることができることをとても貴重な体験であると感じる。これは、伎楽という伝統芸能の分野にとどまらず、芸術の分野でおこってきた様々な流れや、教育の中で語られる様々な思想や理念、ひいては人間がこれまで歩んできた歴史などにも共通して考えられることである。私たちは過去から現在に残されてきたたくさんの伝統・文化を重んじ大切に残していきながら、一度欠けてしまった部分があれば補い、そして未来へむけて新たなものを創造し残していかなければならない。

今回の研究は、今後我々がそういったことを考え、意識してこれから各々の分野で活動していくための礎となった。

(2) 反省点

今年度は研究に重きを置いていたため、制作に遅れが生じたことが反省点に挙げられる。また、回生間での意見交換や共同で行う作業などをもっと活発に行えればよかった。

2. 今後の展望

(1) 昨年同様、プロジェクト終了後に学内で完成作品の展示を行おうと考えている。依頼元に一度納品しなければいけないので今年度末は不可能だが、来年度末に行いたいと考えている。伎楽や木彫に興味がある人はもちろん、そうでない人達にもこの研究を知ってもらい興味を持ってもらいたい。アンケートを設置し、見た人の意見・感想や疑問に思った点などを知ることによって今後役に立てたいと思う。

(2) これまで2年間、伎楽の研究と並行して、伎楽面の制作を行ってきた。来年度はこれまでの経験をもとに、他の表現方法による伎楽面の制作の可能性をさぐりながら、ほかの表現方法を経験し身につけたいと考えている。現在計画しているのは漆を用いた貼り込みによる表現である。今年度の我々の研究に興味をもった人や、来年度の新入生にも声をかけ、研究最終年度となる来年にさらに研究を深めたい。

<参考・引用文献>

参考・引用文献など

東京国立博物館：法隆寺献納宝物 伎楽面

高野辰之：日本史辞典，旺文社

日本歌謡史，五月書房

日本歴史大事典 百科事典マイペディア

河竹繁俊：日本演劇全史，岩波書店

第44回天理大学雅楽部公演パンフレット



ばらもん
婆羅門

制作者：奥 美香



たいこふ
太孤父

制作者：稲村 優